

おきなぐさ

宮沢賢治

青空文庫

うずのしゅげを知っていますか。

うずのしゅげは、植物学ではおきなぐさと呼ばれますが、おきなぐさという名はなんだかあのやさしい若い花をあらわさないようにおもいます。

そんならうずのしゅげとはなんのことかと言われても私にはわかったようなまたわからないような気がします。

それはたとえば私どもの方で、ねこやなぎの花芽をべんべろと言いますが、そのべんべろがなんのことかわかったようなわからないような気がするのと全くおなじです。とにかくべんべろという語のひびきの中に、あの柳の花芽の銀びろうどのころもち、なめらかな春のはじめの光のぐあいを実にはつきり出ているように、うずのしゅげというときは、あの毛科のおきなぐさの黒朱子の花びら、青じろいやはり銀びろうどの刻みのある葉、それから六月のつやつや光る冠毛がみなはつきりと眼にうかびます。

まつ赤なアネモネの花の従兄、きみかげそうやかたくりの花のともだち、このうずのしゅげの花をきらいなものはありません。

ごらんなさい。この花は黒朱子でもこしらえた変わり型のコップのように見えます

が、その黒いのは、たとえば葡萄酒ぶどうしゆが黒く見えると同じです。この花の下を始終往しじゆうたり来たりする蟻ありに私はたずねます。

「おまえはうずのしゆげはすきかい、きらいかい」

あり 蟻は活かっぱつ発はつに答えます。

「大すきです。誰だれだってあの人をきらいなものはありません」

「けれどもあの花はまつ黒だよ」

「いいえ、黒く見えるときもそれはあります。けれどもまるで燃もえあがってまつ赤な時もあります」

「はてな、お前たちの眼めにはそんなぐあいに見えるのかい」

「いいえ、お日さまの光の降ふる時なら誰だれにだってまつ赤に見えるだろうと思います」

「そうそう。もうわかったよ。お前たちはいつでも花をすかして見るのだから」

「そしてあの葉はや茎きだつて立派りっぱでしょう。やわらかな銀ぎんの糸が植うえてあるようでしょう。

私たちの仲間なかまでは誰だれかが病びよう気きにかかったときはあの糸をほんのすこしもらって来てしずかからだをさすつてやります」

「そうかい。それで、結けつ局よく、お前たちはうずのしゆげは大すきなんだろう」

「そうです」

「よろしい。さよなら。気をつけておいで」

この通りです。

また向^むこうの、黒いひのきの森の中のあき地に山男がいます。山男はお日さまに向^むいて倒^{たお}れた木に腰掛^{こしか}けて何か鳥を引き裂^さいてたべようとしているらしいのですが、なぜあの黝^{くろず}んだ黄金の眼玉^{めだま}を地面^{じめん}にじつと向^むけているのでしょうか。鳥をたべることさえ忘^{わす}れたようです。

あれは空地^{あきち}のかれ草の中に一本のうずのしゅげが花をつけ風にかすかにゆれているのを見ているからです。

私は去^{きよ}年^{ねん}のちようど今ごろの風のすきとおったある日のひるまを思い出します。

それは小岩井農場^{こいわいのうじょう}の南、あのゆるやかな七つ森のいちばん西のはずれの西がわでした。かれ草の中に二本のうずのしゅげが、もうその黒いやわらかな花をつけていました。

まばゆい白い雲が小さな小さなきれになつて碎^{くだ}けてみだれて、空をいっぱい東の方へどんどんどん飛びました。

お日さまは何べんも雲にかくされて銀^{ぎん}の鏡^{かがみ}のように白く光ったり、またかがやいて大き

な宝^{ほうせき}石^{いし}のように蒼^{あお}ぞらの淵^{ふち}にかかったりしました。

山^{さんみやく}脈^{みやく}の雪はまっ白に燃^もえ、眼^めの前の野原は黄^きいろや茶の縞^{しま}になってあちこち掘^ほり起^おこされた畑^{はたけ}は鳶^{とび}いろの四角^{しかく}なきれをあてたように見えたりしました。

おきなぐさはその変^{へんげん}幻^{まぼろし}の光^{ひかり}の奇術^{トリック}の中で夢^{ゆめ}よりもしずかに話^わしました。

「ねえ、雲がまたお日さんにかかるよ。そら向^むここの畑^{はたけ}がもう陰^{かげ}になった」

「走^はって来る、早いねえ、もうから松^{まつ}も暗^{くら}くなった。もう越^こえた」

「来た、来た。おおくらい。急^{きゆう}にあたりが青^{あお}くしんとなった」

「うん、だけでもう雲が半分お日さんの下をくぐってしまったよ。すぐ明るくなるんだよ」

「もう出る。そら、ああ明るくなった」

「だめだい。また来るよ、そら、ね、もう向^むここのポプラの木が黒^{くろ}くなったろう」

「うん。まるでまわり燈籠^{とうろう}のようだねえ」

「おい、ごらん。山の雪の上でも雲のかけがすべってるよ。あすこ。そら。ここよりも動^{うご}きようがおせいねえ」

「もうおりて来る。ああこんどは早い早い、まるで落^おちて来るようだ。もうふもとまで来^こちゃった。おや、どこへ行ったんだろう、見えなくなってしまった」

「不思議だねえ、雲なんてどこから出て来るんだらう。ねえ、西のそらは青じろくて光つてよく晴れてるだらう。そして風がどンドン空を吹いてるだらう。それだのにいつまでたつても雲がなくならないじゃないか」

「いいや、あすこから雲が湧いて来るんだよ。そら、あすこに小さな小さな雲きれが出たろう。きつと大きくなるよ」

「ああ、ほんとうにそうだね、大きくなつたねえ。もう兎ぐらいある」

「どんどんかけて来る。早い早い、大きくなつた、白熊のようだ」

「またお日さんへかかる。暗くなるぜ、奇麗だねえ。ああ奇麗。雲のへりがまるで虹で飾つたようだ」

西の方の遠くの空でさつきまで一生けん命啼いていたひばりがこの時風に流されて羽を變にかしげながら二人のそばに降りて来たのでした。

「今日は、風があつていけませんね」

「おや、ひばりさん、いらつしやい。今日なんか高いところは風が強いでしょうね」

「ええ、ひどい風ですよ。大きく口をあくと風が僕のからだをまるで麦酒瓶のようにポウと鳴らして行くくらいですからね。わめくも歌うも容易のこつちやありませんよ」

「そうでしようね。だけどここから見ているとほんとうに風はおもしろそうですよ。僕たちも一ぺん飛んでみたいなあ」

「飛べるとこじやない。もう二か月お待ちなさい。いやでも飛ばなくちやなりません」

それから二か月めでした。私は御明神へ行く途中も一ぺんそこへ寄つたのでした。

丘はすっかり緑でほたるかずらの花が子供の青い瞳のよう、小岩井の野原には牧草や燕麦がきんきん光っております。風はもう南から吹いていました。

春の二つのうずのしゅげの花はすっかりふさふさした銀毛の房にかわっていました。

野原のポプラの錫いろの葉をちらちらひるがえし、ふもとの草が青い黄金のかがやきをあげますと、その二つのうずのしゅげの銀毛の房はぶるぶるふるえて今にも飛び立ちそうでした。

そしてひばりがひくく丘の上を飛んでやって来たのでした。

「今日は。いいお天気です。どうです。もう飛ぶばかりでしょう」

「ええ、もう僕たち遠いとこへ行きますよ。どの風が僕たちを連れて行くかさつきから見ているんです」

「どうです。飛んで行くのはいやですか」

「なんともありません。僕たちの仕事はもう済んだんです」

「こわかありませんか」

「いいえ、飛んだつてどこへ行つたつて野はらはお日さんのひかりでいっぱいですよ。僕たちばらばらになろうたつて、どこかのたまり水の上に落ちようたつて、お日さんちゃんを見ていらつしやるんですよ」

「そうです、そうです。なんにもこわいことはありません。僕だつてもういつまでこの野原にいるかわかりません。もし来年もいるようだつたら来年は僕はここへ巣をつくりますよ」

「ええ、ありがとう。ああ、僕まるで息がせいせいする。きつと今度の風だ。ひばりさん、さよなら」

「僕も、ひばりさん、さよなら」

「じゃ、さよなら、お大事においでなさい」

奇麗なすきとおつた風がやつて参りました。まず向こうのポプラをひるがえし、青の燕麦に波をたてそれから丘にのぼつて来ました。

うずのしゆげは光つてまるで踊るようにふらふらして叫びました。

「さよなら、ひばりさん、さよなら、みなさん。お日さん、ありがとうございました」

そしてちょうど星が砕けて散るときのように、からだがばらばらになって一本ずつの銀毛はまつしろに光り、羽虫のように北の方へ飛んで行きました。そしてひばりは鉄砲玉のように空へとびあがつて鋭いみじかい歌をほんのちよつと歌ったのでした。

私は考えます。なぜひばりはうずのしゆげの銀毛の飛んで行った北の方へ飛ばなかったか、まつすぐに空の方へ飛んだか。

それはたしかに、二つのうずのしゆげのたましいが天の方へ行つたからです。そしてもう追いつけなくなつたときひばりはあのみじかい別れの歌を贈つたのだらうと思います。そんなら天上へ行つた二つの小さなたましいはどうなつたか、私はそれは二つの小さな変光星になつたと思います。なぜなら変光星はあるときは黒くて天文台からも見えず、あるときは蟻が言つたように赤く光つて見えるからです。

青空文庫情報

底本：「銀河鉄道の夜」角川文庫、角川書店

1969（昭和44）年7月20日改版初版発行

1993（平成5）年6月20日改版71版発行

入力：薦田佳子

校正：平野彩子

2000年8月25日公開

2012年2月16日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

おきなぐさ

宮沢賢治

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>